

新年度の取り組みから

# 教育協同に関する研究について

——「黄柳野の教育・協同」模索と創造——

増山 均（愛知県／日本福祉大学教授）

子どもたちの間での「いじめ」による自殺や不登校のひろがり、父母の間での子育て不安や学校への不信、教師の間での過重な労働による疲労と苦悩、いま日本の学校と教育のまわりには困難が山積し、改革への展望を明確に描けずにいる。こうした状況の中であって、1995年4月、100万人の市民の力によって設立され開校にたどりついた黄柳野高校は、日本の公教育史上画期的な、最初の「市民立」の学校として、大きな期待と注目を集めつつ2年目の実践に入った。黄柳野高校は、法制上は「私立学校法」の適用を受ける私立学校であるが、建学の精神である「市民立」を貫くために、日本で最初の本格的な教育協同組合に支えられた学校づくりが模索されている。今準備されている「『黄柳野教育文化協同組合』設立趣意書（案）」には、日本の教育史に新しいページを開くことを目指して次のように書かれている。

「利益追求のみにひた走ってきた日本の経済をはじめとする先進国の経済は、大量生産、大量消費、大量廃棄のもとに、地域の自然破壊など多くの危機を招いています。いまや、その経済システム自体が、至る所で破綻し、大量失業時代に突入してきています。教育は、人間が人間らしく生きていく上で必要な基礎的な能力を身につけ、個性的な発達を保障することです。しかし、今の多くの学校は、『効率のよさ』『競争原理』に支配され、人間らしく生きる力が喪失させられ、教育上の諸問題を生み、いじめ、暴力、自殺など社会問題化しています。そのような社会システム、経済システム、教育システムが行き詰まり、機能しなくな

る中で、人間らしくいきたい、人間らしい力を育てたい、生き甲斐のある労働をしたい、自然との共生を求めたい、と願う全国の大勢の人々が、大資本や行政に頼らないで自分たちの力で『人間教育を実践する学校』として黄柳野高校の建設に協力し、このことで『仕事おこし』『地域おこし』もすすめるこの黄柳野の運動に結集しました」と。

黄柳野高校は、一足先に開設した「黄柳野塾・設楽」とともに、文字通り歴史的な新しい挑戦、創造への苦難にたちむかっている。「人間教育」実現への理想は「子どもの権利条約」の精神を具体化する学校として自らを位置づけ、わかるまで学び、ひとりもおちこぼさない教育を、思いやりと自立の心を、労働体験により生きた学力を、みずみずしい感性と豊かな創造力を、父母・地域との協力で開かれた学校づくりに、全教職員スタッフが一丸となってとりくんでいる。

しかし、不登校やいじめなどの諸問題を背負って全国から集まり、全寮制のもとで生活と学習を開始した子どもたちの現実はきびしい。

寮の中での「いじめ事件」も起こった。寮にひきこもり授業に出ない生徒もいる。理想としてかけられる人間教育への道は容易ではないが、一方、すべての生徒が参加して豊川から黄柳野高校まで36キロのオールナイトウォークを生徒会の自治の力で成功させた。H I V訴訟支援や平和運動など社会的な活動に積極的にとり組む生徒たちもいる。労働を軸にすえたフリースクール「設楽」の子どもたちの変化と成長には目を見はるものがある。今、黄柳野では苦難の中に生まれつつある未



来への新しい胎動を見すえる教職員スタッフの情熱的实践を通して、教育協同への可能性が追求されている。

こうした動きの中で、協同総研は1995年度の事業として『非営利・協同の大連合』への支援を位置づけ、その具体化として「黄柳野高校の開校を財政的に支援するとともに、その『教育協同組合』としての発進のために、理論的・政策的な側面から協力」を行ってきた。教育協同組合の内実をつくる上で、三つのポイント（①教職員集団の『労働者協同組合』としての確立、②教職員、父母、生徒、さらに支援者代表による複合的な『教育協同組合』モデル、③黄柳野高校に留まらない、全国的な教育協同組合運動の拠点となること）を提言してきたが、1996年度の事業として、黄柳野高校の具体的な実践の展開に即して研究活動をすすめるための調査に着手することになった。以下、1996年度黄柳野高校研究調査に関する計画の概略を紹介すると次のようである。

## 〈研究テーマ〉

「黄柳野の教育・協同——模索と創造」

## 〈研究調査の視点と項目〉

(1)黄柳野高校の設立と実践の中から生まれつつある新しい教育観・学校観・学習観・子ども観を、次の三つの視点の関連をとおして探る。

- ①教育理念としての「人間教育（人間としての自立）」の実現状況——「黄柳野高校」と「黄柳野塾・設楽」のとりくみを中心に。
- ②学校づくりの理念としての「市民立」の意義と学校の経営——「人間教育をすすめる学園を共につくる会」のとりくみを中心に。
- ③教育・学校がめざす地域づくりをすすめる「協同」への提案——「つげの森市民ネットワーク」、「有限会社黄柳野企画」、「黄柳野支援の会」のとりくみを中心に。

(2)黄柳野高校での教育実践を中心軸にすえて、地域おこしと学校、生産労働と学校、市民運動と学

校、などの関連から教育実践の質的深化を分析し、「教育協同組合」の理念と課題と可能性を探る。

(3)黄柳野の実践とひびきあう内外の教育思想・教育運動の研究。——わが国の子育て文化協同の運動や海外のモンドラゴンの教育協同組合、フレネの学校協同組合の実践など。

「黄柳野の教育・協同——模索と創造」というテーマは、学校における教育実践とそれを支える地域の教育力・経済社会システムの構築、人間教育の学校づくりと仕事おこし・地域づくりの構築を結合してとらえようとする試みである。黄柳野高校はまだ開校2年目であり、目標にかかげる理想の教育にむけてあらゆる面で模索の途上であるが、理想実現への萌芽と可能性がどのように形成されつつあるかを調査研究しようという試みである。

調査研究のスタッフとしては、当面黄柳野高校側から富田英夫、神谷吉保の両氏と、市民立・協同の学校経営のもつ教育改革への可能性の課題を主に担当する中田宗一郎氏（日本労働者協同組合連合会）、黄柳野の教育実践に即して教育観、子ども観、学校観の展開の調査を担当する鈴木剛氏（愛知教育大学）、そして全体のコーディネイトは増山が担当しつつ、5月17日、18日予備調査を開始した。

今後、数回の現地調査を行い、中間的なまとめは今秋予定されている「いま『協同』を問う'96全国集会」で報告される。教育協同組合の理論と実践に関心をよせる多くの方々への参加と協力を仰ぎたい。